

A 大学における学生の薬物乱用に関する調査結果 — 2015年度予備報告 —

Drug abuse among the students at one Japanese university
— Preliminary report of 2015 study —

西村 由貴* 木島 伸彦** 伊東 裕司*** 河邊 博史*

慶應保健研究, 34(1), 023-028, 2016

要旨: A 大学において大学生の薬物乱用問題に予防的対応を行うため、実態を把握し、啓発活動につなげることを目的として、大学生を対象にアンケート調査を実施した。(方法) 2015年度の授業期間中、3名の教員の講義中に薬物乱用問題を取り上げ、受講する学生に啓発的アンケート調査への協力を依頼した。対象出席者は、延べ580名であった。この中、回収された調査票は543票であり、調査参加率は93.6%であった。調査票は精神保健研究所 薬物依存研究部が2009年に使用した「大学生の飲酒・喫煙・薬物乱用に関するアンケート」を基礎とした。(結果) 参加大学生の3%が向精神薬、2.8%が大麻、2.1%が危険ドラッグ、2.1%が不明の物質の生涯使用経験があった。大麻の使用経験がある者は、大麻以外の薬物の使用経験の有無に有意差がみられた。特に有機溶剤、覚醒剤、幻覚キノコの経験者の100%、コカイン経験者の90%が大麻使用経験者であった。このような大麻中心型多剤使用群に対し、MDMAや向精神薬、危険ドラッグ使用者では大麻不使用の者も多く、非大麻型薬物個別使用群といえる集団も存在することがわかった。今後は、公的規制ではなく、健康管理教育として薬物乱用防止に取り組むことが必要である

keywords: 大学生, 薬物乱用, 危険ドラッグ, 大麻中心型多剤使用群, 非大麻型薬物個別使用群
student, drug abuse, dangerous drug, multiple substance users with marijuana,
individual substance users without marijuana

はじめに

薬物乱用問題は、中枢神経系の発達過程にある青少年においては、一層の有害性が懸念される。近年は、パーソナルコンピュータやスマートフォンの普及により、未成年者でも、容易にネットワークに接続し、薬物に関する情報を入手することができるようになった。更に、オンラインで物質を購入することが可能になったため、売人を介することなく薬物を直接入手できるようになり、罪悪感も低減している¹⁾。第

1次乱用時代には、青少年の薬物乱用者といえば、暴走族や非行少年といった、いわゆる「不良」と呼ばれる一群の人々を指していた。このため、乱用対策のターゲットの絞込みは比較的容易であった。しかし、現在では、人と接触することなく、小遣いの範囲でも薬物が入手できるようになり、乱用対策のターゲットは大きく拡大している¹⁾。

こうした問題への危機感から、文部科学省が薬物乱用問題の教育を義務化した。関西の4大

*慶應義塾大学保健管理センター **慶應義塾大学商学部 ***慶應義塾大学文学部
(著者連絡先) 西村 由貴 〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

学では新年度入学生を対象に、「薬物に関する意識調査」を毎年実施しており、2015年度の結果を見ると（26,576名）、「あなたはこれらの薬物を使ったり、持っていたりした場合、どうなると思いますか」に「すべて罰せられる」とした者が95%に対し、「持っているだけでは罰せられることはない」とした者が1%、「使ったり持っていたりしても罰せられることはない」も1%であった²⁾。同調査において、「他人に迷惑をかけないのであれば、（薬物の使用は）個人の自由」とした者が6%であった。また6%の学生が、「メディアを媒介せずに薬物使用を直接目撃したことがある」としていた。さらに、「使用・購入を勧誘された場合、断らないかもしれない」とした者が4.5%いた²⁾。

A大学では、学生の薬物乱用問題に対して、これまでは個別事例ごと、学部ごとに対応が行われてきた。しかし、かつて合法または脱法ドラッグとよばれ現在危険ドラッグと称する物質を使用した上での事件・事故が散見されるようになり、大学を上げた取り組みが必要であるとの危機感が持たれるようになった。今回、大学入学までに最低3回、薬物乱用教育を受けた学生が、実際に薬物乱用に対して、どのような意識を有しているか、周囲に使用者がどの程度いるか、に加えて自身の使用経験をアンケート調査から明らかにし、問題意識の啓発と今後の対応を検討した。

対象と方法

調査期間は、2015年度の授業期間中（2015年4月～2016年1月）である。

対象者は、A大学学生である。教員3名（X, Y, Z）の講義時間内に、薬物乱用の問題について講義を受け、調査に関するインフォームド・コンセントを書面および口頭で受け、同意の得られた者を対象とした。学生の所属学部は、単一ではなく、主として文学部・商学部・法学部・経済学部、加えて他の学部生も少数含まれた。履修登録学生数は912名、調査実施日出席

者は580名（延べ出席率63.6%）、回収された調査票は543票であり、出席者に対する参加率は93.6%であった。

調査票は、平成19年度厚生労働科学研究の「大学新入生における薬物乱用実態に関する研究」にて用いられている「大学生の薬物乱用（含アルコール）に関するアンケート」（無記名自記式質問紙³⁾）を使用した。本調査票の使用にあたっては、国立研究開発法人 国立精神・神経医療センター 精神保健研究所 薬物依存研究部（精神保健研究所薬物依存研究部）に使用の許諾を得た。

統計解析には、統計パッケージSPSS for Windows ver.22.0を用いた。

結果

1) 人口統計学的特性

男女比は1.1、平均年齢は 19.9 ± 1 歳（最低18歳、最高29歳）。飲酒経験者は86.7%、喫煙経験者は14.0%であった。（不明を除く）

2) 周囲に薬物乱用者がいるか

有機溶剤は3名（0.6%）、大麻は19名（3.6%）、覚せい剤は5名（1.0%）、MDMAは3名（0.6%）、幻覚きのこ5名（1.2%）、コカイン2名（0.4%）、ガス4名（1.0%）、向精神薬23名（5.1%）、リタリン0名、ラッシュ1名（0.3%）、その他の薬物4名（1.1%）、不明物質4名（1.1%）であった。

3) 薬物使用の勧誘を受けたことがあるか

有機溶剤は2名、大麻は13名、MDMAは1名、幻覚きのこ2名、コカイン2名、ガス2名、向精神薬4名、リタリン1名であり、覚せい剤とラッシュ、その他の薬物はいなかった。

4) 入手可能性

入手可能性に関する質問に対する回答のうち、「簡単に手に入る」または「なんとか手に入る」を「入手可能」、「絶対不可能」または「ほとんど不可能」を「入手不可能」として分析した。入手可能者は、有機溶剤

は67名 (13.4%), 大麻は54名 (10.6%), 覚せい剤は34名 (6.7%), MDMAは32名 (6.2%), 幻覚きのこ29名 (6.4%), コカイン3名 (6.3%), ガス40名 (10.1%), 向精神薬102名 (22.3%), リタリン40名 (12.5%), ラッシュ13名 (4.0%)であった。

5) 薬物の使用経験

有機溶剤は9名(1.7%), 大麻は15名(2.8%), 覚せい剤は9名(1.7%), MDMAは9名(1.7%), 幻覚きのこ8名(1.5%), コカイン10名(1.9%), ガス9名(1.9%), 向精神薬16名(3.0%), リタリン5名(0.9%), ラッシュ4名(0.8%), その他の薬物10名(2.1%), 不明物質10名(2.1%)であった。ただし、向精神薬とリタリンは医師の処方に基づかない不正な使用を指している。

6) 飲酒経験との関連

「その薬物を知らない」とした者を除いて

関連性を分析すると、飲酒経験の有無で統計学的有意差を認める薬物はなかった。

7) 喫煙経験との関連

喫煙経験のある者では、ラッシュの入手が不可能とする者が有意 ($p<0.05$) に多かったが、その他の薬物については、「その薬物を知らない」とした者を除いて関連性を分析すると、喫煙経験の有無で統計学的有意差はみられなかった。

8) 大麻経験との関連

8-1) 周囲にその薬物の乱用者がいる(表1)

周囲に大麻 ($p<0.05$), 向精神薬 ($p<0.05$), ラッシュ ($p<0.05$), 幻覚きのこ ($p<0.01$) の乱用者がいるという者では、自身が大麻使用経験者の割合が有意に高かった。「その薬物を知らない」とする者を「周囲に乱用者がいない」者として統計学的処理をすると有意差が更に明確となった(表1)。

表1 大麻の生涯使用経験の有無と周囲の各種薬物の乱用者の存否の関係

周囲の乱用者	大麻経験		
	あり	なし	
有機溶剤	いる	0 (0.0)	3 (100)
	いない	15 (2.9)	495 (97.1)
大麻*	いる	3 (15.8)	16 (84.2)
	いない	12 (2.4)	484 (97.6)
覚醒剤	いる	1 (20.0)	4 (80.0)
	いない	14 (2.7)	496 (97.3)
MDMA	いる	1 (33.3)	2 (66.7)
	いない	14 (2.7)	498 (97.3)
幻覚きのこ**	いる	2 (40.0)	3 (60.0)
	いない	13 (2.5)	497 (97.5)
コカイン	いる	0 (0.0)	2 (100)
	いない	15 (2.9)	498 (97.1)
ガス	いる	1 (25.0)	3 (75.0)
	いない	14 (2.7)	496 (97.3)
向精神薬*	いる	3 (13.0)	20 (87.0)
	いない	12 (2.5)	477 (97.5)
ラッシュ*	いる	1 (100)	0 (0.0)
	いない	14 (2.7)	496 (97.3)
その他	いる	0 (0.0)	4 (100)
	いない	14 (3.3)	414 (96.7)
不明	いる	0 (0.0)	4 (100)
	いない	12 (3.1)	370 (96.9)

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

表2 大麻の生涯使用経験の有無と各種薬物の入手可能性の有無の関係

入 手	大 麻 経 験		
	あ り	な し	
有機溶剤	可能	3 (4.5)	64 (95.5)
	不可能	11 (2.5)	421 (97.5)
大麻*	可能	5 (9.3)	49 (90.7)
	不可能	10 (2.2)	445 (97.8)
覚醒剤*	可能	4 (11.8)	30 (88.2)
	不可能	11 (2.3)	463 (97.7)
MDMA*	可能	4 (12.9)	27 (87.1)
	不可能	11 (2.4)	453 (97.6)
幻覚きのこ**	可能	4 (13.8)	25 (86.2)
	不可能	10 (2.4)	410 (97.6)
コカイン	可能	3 (9.7)	28 (90.3)
	不可能	12 (2.6)	446 (97.4)
ガス*	可能	4 (10.0)	36 (92.0)
	不可能	9 (2.5)	345 (97.5)
向精神薬	可能	4 (3.9)	98 (96.1)
	不可能	9 (2.5)	345 (97.5)
ラッシュ*	可能	0 (0.0)	13 (100)
	不可能	10 (3.2)	301 (96.8)
その他	可能	0 (0.0)	4 (100)
	不可能	14 (3.3)	414 (96.7)
不明	可能	0 (0.0)	4 (100)
	不可能	12 (3.1)	370 (96.9)

*p<0.05, **p<0.01

8-2) その薬物が手入る可能性 (表2)

大麻, 覚醒剤, MDMA, ガスを手に入れることができるとした者では, 大麻の使用経験者の比率が有意 ($p<0.05$) に高かった。ラッシュを手に入れることができないとした者では, 大麻の使用経験者の比率が有意 ($p<0.05$) に高かった。「その薬物を知らない」とする者を「入手不可能」者として統計学的処理をすると有意差が更に明確となった。

8-3) その薬物の使用経験がある (表3)

有機溶剤, 大麻, 覚醒剤, MDMA, 幻覚きのこ, コカイン, ガス, 向精神薬, リタリン, ラッシュ, その他の薬物, 不明物質の使用経験があるとした者の全てにおいて, 大麻の使用経験がある者の比率が有意 ($p<0.01$) に高かった。特に, 有機溶剤, 覚醒剤, 幻覚きのこ経験者の100%, コカイン経験者の90%が大麻使用経験者であった。一方, ラッシュ,

その他の薬物や不明物質の使用経験者では, 大麻の使用経験がない者の比率もある程度あり, MDMAや向精神薬の使用経験者では, 大麻の使用経験がない者が50%以上を占めた。「その薬物を知らない」とする者を「使用したことがない」者として統計学的処理をすると有意差が更に明確となった (表3)。

考察

今回は, 向精神薬を除き, 使用経験のある者が最も多かった「大麻」に焦点をあてて分析を行った。2009年に, 精神保健研究所薬物依存研究部が福島大学と共同で行った研究では, 大学生250名中, 何らかの薬物の生涯経験率は1.6%, 内訳は向精神薬0.8%, 大麻0.5%, 有機溶剤0.3%であり, 他の薬物は報告されなかったと報告している³⁾。今回の調査では, 提示した10種の薬物全てについて生涯使用経験者が

表3 大麻の生涯使用経験の有無と他の各種薬物の生涯使用経験の有無の関係

使用経験	大麻使用経験			
	あり	あり	なし	なし
有機溶剤*	あり	9 (100)	0 (0.0)	
	なし	6 (1.2)	502 (98.8)	
覚醒剤*	あり	9 (100)	0 (0.0)	
	なし	6 (1.2)	502 (98.8)	
MDMA*	あり	4 (12.9)	27 (87.1)	
	なし	11 (2.4)	453 (97.6)	
幻覚きのこ*	あり	8 (100)	0 (0.0)	
	なし	7 (1.4)	502 (98.6)	
コカイン*	あり	9 (90.0)	1 (10.0)	
	なし	6 (1.2)	501 (98.8)	
ガス*	あり	7 (77.8)	2 (22.2)	
	なし	8 (1.6)	500 (98.4)	
向精神薬*	あり	8 (50.0)	8 (50.0)	
	なし	7 (1.4)	494 (98.6)	
リタリン*	あり	4 (80.0)	1 (20.0)	
	なし	10 (2.0)	499 (98.0)	
ラッシュ*	あり	3 (75.0)	1 (25.0)	
	なし	12 (2.3)	499 (97.7)	
その他*	あり	7 (70.0)	3 (30.0)	
	なし	7 (1.6)	443 (98.4)	
不明*	あり	7 (70.0)	3 (30.0)	
	なし	7 (1.5)	447 (98.5)	

*p<0.01

存在し、その他の薬物（いわゆる危険ドラッグ）や不明物質（何かわからない物質）の生涯使用経験者も存在した。本調査でも、上位は向精神薬3.0%、大麻2.8%、その他の薬物2.1%、不明物質2.1%であった。調査対象が異なるため、単純な比較はできないが、2009年報告時より7年経過し、薬物使用者が増加していること、その他の薬物や不明の物質の使用者が存在することなど、薬物乱用の状況の変化が示唆される。

大麻の使用経験者では、周囲に大麻や覚醒剤、MDMA、ガス、幻覚きのこの乱用者がいるとする者の割合が多いが、有機溶剤やコカイン、その他の薬物や不明物質の乱用者はいなかった。また、その他の薬物や不明物質を入手可能とした者では、大麻使用経験はなく、一方、大麻の使用経験のある者は、その他の薬物や不明物質を入手可能と回答したことから、これらの薬物については単独使用が多いことが示唆された。

大麻の生涯使用経験者は、有機溶剤、覚醒剤、幻覚きのこ、コカインも使っている者が多く、多剤使用が強く示唆される。一方、向精神薬やMDMA、その他の薬物は、必ずしも大麻使用者と重複していないことから、薬物乱用者には、大麻中心型多剤使用群に加えて、非大麻型薬物個別使用群が存在することが、今回の調査から明らかになった。非大麻型薬物使用群は、単独で薬物の入手・使用を行っており、近年のネットワーク技術の進歩と危険ドラッグの流行によって出現してきた群と考えられる。従来、薬物問題は、警察庁や入国管理局などが、違法行為として取り締まってきた。しかし、現在でも一部の危険ドラッグが合法的に入手できることから、取り締まり対象集団（例えば組織暴力団）の媒介がない場合、公的規制には限界がある。今後は、健康管理の一環として薬物乱用防止教育に取り組むことが必要である。

まとめ

A大学学生の2015年度薬物乱用調査の結果、危険ドラッグを含む各種薬物の生涯使用経験者が存在した。この中には大麻中心型多剤使用群と、非大麻型薬物個別使用群が存在し、今後公的規制ではなく、健康管理の一環として、薬物乱用防止教育に取り組むことが必要である。

文献

- 1) 西村由貴. 青少年の薬物乱用の現状と防止教育の必要性. 慶應保健研究 2014 ; 33
- 2) 楠見晴重, 村田治, 村田晃嗣, 他. 2015年度関西4大学「薬物に関する意識調査」集計結果報告書. 2015
- 3) 和田清, 嶋根卓也, 三島健一, 他. 大学生の違法ドラッグを含む薬物乱用実態に関する研究(2009年). 平成21年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究分担研究報告. 2009